

往来問行

とーくたいむ

手嶋龍一さん

ライオンと蜘蛛の巣

拉致や偽札といった北朝鮮などの問題をめぐる情報戦をリアルに描いたベストセラー小説「ウルトラ・ダラー」(新潮社)が評判となった手嶋龍一さんが今月、新作「ライオンと蜘蛛の巣」(幻冬舎、一五七五円)を出した。ジャーナリストとして出会った各国の政治家や小説の主人公の諜報員、文化人など幅広い人々との交流を独特の繊細な筆で描く。世界の動きの裏側を見届けてきたこの人の引き出しの中を見せてくれる一冊だ。(編集委員 橋井潤)

——エッセーでもない。紀行文でもない。もちろん小説ではない。不思議な印象を受けます。帯では「小説のようなノンフィクション」と紹介してもらいました。登場人物は全部実名で、事実だけを書き、私の「情」の部分は極力省いています。だから、普通のエッセーや紀行文とは読んだ感じが違うのでしょう。「ノンフィクション短編集」とでも呼べばよいのでしょうか。何本かを除いて、ほとんど全部が書き下ろしです。

——小説「ウルトラ・ダラー」の主人公も登場します。この小説と今回の本、そして前職の記者の仕事との関係は？

「ウルトラ・ダラー」については「これを小説だと言っているのは著者だけだ」と言われていまして(笑)。「どこまで本当ですか」と聞かれると、「ほとんど本当」と答えます。執筆当時には公になっていなかったマカオでの資金洗浄など、事実が小説を追いかけている部分もありました。

分もあります。ノンフィクションではなく小説という形をとったのは、主として情報源の秘匿のためです。記者時代はどんなに重要な情報でも裏を取らなければ放送できなかったが、小説なら書けるということもありました。「ライオンと」では取材源を守る必要がないので、全部実名で書きました。

——食べ物、ギャンブル、古い宿屋や仕立屋……と魅力的な場所や事柄のオンパレード。読んだ後、実際に訪ねてみたくなります。

——そういう読者のために、地図や注意書きも付けました。行っ

惑に負けそうになることもたびたびでしたが……。それにしても、吉田さん親子の先進的な生き方は道産子の一人として尊敬しています。北海道の将来を考えるのに、ノーザンファームのやり方をもっと参考にしたいと常々思っています。

——年齢からいうと団塊の世代。でも、他の人と少々感覚が違ふような気がします。

ある編集者に言わせると、私には、同じ世代の作家が共通して持つ三つの要素が欠けているのだそうです。それは①高度経済成長②受験戦争③戦後民主主義への信奉……だということです。まず高度成長ですが、父は炭鉱経営者で、世の中とは反対に家はどんどん貧しくなりましたから、実感がありませんでした。受験戦争も、高校は小学区制だったので全く経験なし。戦後民主主義については、父と炭鉱の労働組合の幹部の裏交渉などを見聞きしていたので、幻想を持ちませんでした。それがほかの人たちとの違いでしょうかね。

登場人物は全部実名

情を省き事実だけを

ていただければ、ここに書いたとおりであるとお分かりいただけると思います。



橋井潤撮影

てしま・りゅういち 1949年、芦別市生まれ。岩見沢東高、慶応大卒。NHK記者として外交と安全保障を取材。97年から2005年までワシントン支局長。同時多発テロ報道などで注目された。05年にNHKを退職し、外交ジャーナリスト・作家として独立。著書に「ニッポンFSXを撃て」（新潮社）や「一九九一年 日本の敗北」（同）など。

——有名な政治家やスパイと肩を並べて登場するのが胆振管内安平町のノーザンファームの吉田勝己さん親子というのがひととき印象的です。

ディープリンパクトを育てた吉田さん親子とは古いつきあいでお父さんの善哉さんには息子のようにかわいがっていたいただきました。実は「ライオンと」は、ほとんどノーザンファームに泊まり込みで書いたのです。一年に一度、当歳馬の競りの時にしか使わない事務所を貸してもらいました。おかげで静かな環境で落ち着いて書くことができました。そのため「ウルトラ・ダラー」とは文章のタッチも随分違ってきます。近くにゴルフ場や温泉がたくさんあり、誘

——今後はどんな作品を考えていますか。

絶対に書きたいと思っているのは芦別事件です。松川事件など戦後の謀略事件に連なる事件ですが、使われた信管は父の炭鉱にあったものです。当時父の所には、田中清玄や児玉誉士夫といった右翼の大物が組合つづしのために出入りしていたし、またクーデター未遂事件の「三無事件」の首謀者も来ていました。歴史の中に埋もれてしまった事件ですが、真相はどうだったのか。取り組んでみたいと思います。

◇芦別事件 1952年夏、根室線の線路が爆破された事件。炭鉱労働者が逮捕されたが無罪が確定し、真相は不明。